
探検家にも冒険家にもなれなかった男の自嘲

徳田隆一

探検する行為って何だろう……。旅行でもレジャーでもなし、さりとてスポーツでもなし。そのようなものを、探検と呼べば、余りにもあいまいか。胸わくわくするでもなし、さりとて爽快感が伴うものでもなし。そのようなものを探検と呼べば、一体誰が行なうのか。

かの大航海時代の探検は、その時代のあらゆる価値感を、牛耳ったに違いない。しかし、それを思い出すのは、死んだ子の年を数えるようなものであまり意味がない。それじゃ今はどうなのかというと、いろんな価値感が、割りと仲よくやっていると、いう複数価値共存の時代と呼べるのではないか。

そのような中で、探検する行為は決して非難されなくなったらしいが、決して称賛されなくなつた。なんだか難しい。しこしこやる以外方法は見つからぬ。ひきょうだが、自分だけを信ずる事の原点に逆る。

現在の私は、学校を卒業したと同時に、あこがれの冒険族をも卒業したらしい。それも全単位不可なりで。しかしあこがれの冒険族なんて苦しいって事だけの裏返し。それを気にするのは時間のむだというもの。

あこがれから本当の冒険族に、華麗な変身。ただその範中が自然社会から人間社会に変わるかも。でも何となく負け犬の遠ぼえみたい。(OB)

一人の山 二人の冬

四方立夫

山 一 人

山とは、自然と己の知恵比べであり、己自身との戦いである。そして、その戦いの過程が、自分にとって唯一の経験であり、自己形成である。そう考えれば考える程、又、信じれば信じる程、単

独行以外の山へのアプローチは、自己と山に対する欺瞞でしかない様に思われて来た。

暇と金を算段しこれを目指さなければならなかつた事から、ロジカル・クライムが実動より先行したのはある程度当然の成り行きでもあつた。そうした机上登山の中からあみ出された、幾つかの

法則（そう大きな物では無いが、私はこう呼んでいた）は、その殆どが、机上性と経験の矛盾から、どこかの山に捨て去って来た。こうした机上から弾き出された法則は、汚物の如く捨て去る事は出来ても、その机上の法則が生まれ出た思考過程と実際の経験を置き忘れ、次の山を目指す事は断じて出来なかった。そこでは、必ず「何が故に矛盾を生じさせたか」の冷静な分析と、その分析されたことが、その時の経験によって吟味された。こうした反省の為には、多大な時間が費やされ、得られた経験な確実に消化し、己の物として来た。

登り詰めねばならぬあの苦しみ。理由もなく迫りくる不安。そして、新しい物に触れた満悦。そうした総ての物理と心情の中に反省の素材が含まれていた。

‘山に通い詰めたあげく、自然と身に付いた知識と技術’といった、回想による肉体的評価で留めて置くのは、余りに勿体ない様な気がして、とても嫌であった。こう云った消極的な登山は、「登山」というものを真剣にとらえて見た時、寧ろ、「登山」の範疇外の存在で有る。‘登山は、個人の内に発芽し、表現され、個人の内に帰結されるものである。’と信じていた。ただ、この言葉の裏に擁蔽され、時には、それを盾に、自己の正当性への論理に引用される落とし穴に、注視せねばならない。それは、己の得て勝手な、或いは、その場限りの、欲望を充足させんが為に行なわれる行為の正当化である。

活動のとらえ方を、こうした単発作業の繰り返して終っていたならば、何も苦しまず、楽しく有り、ナウな生き方であろうが、私には、とても自己形成の一部とはなり得なかった。逆に、そうある為には、展開と発展の伴なう持続性のある山である必要があった。

では、それまでの山行が、充分に反省され、本

当に己の物として体得し得たか否かのパラメーターとは何であろうか。それは、「例え、それが通い慣れた山域であったとしても、次の山行で、新しい発見に触れた悦びが、前回のそれと同等以上である事。」であった。これが本当に行きえた時、

$1 + 1 = 2$ という個人としてMAXIMUMな成長があると信じていた。と同時に、そこには次の計画が、自ずと生まれてきていた。そういう深い反省の中から自然発生的に生まれた計画を、次に実行した時の喜びは最大のものであった。そこには主体性以外の何物も無いからである。これは、自分と山と同化した純粋な時代であった。

思えば、懐かしい12年前の中学時代の話である。やっと物心付いた頃の山に対する考え方だけに、幼稚で有り、詭激な考え方でも有ったが、方法論として見た場合、苦しくは有るが、決して、明日を見失う心配の無い山で有った。

こうした、私の現役以前を振り返り、今、現役諸君が、年間活動方針は疎か差当たっての合宿計画も曖昧である率を見ていると、貴重な活動の反省がなされていない様だ。中には、ろくすっぽ反省会も開かず、報告書を作製し、その事が逆に、反省した事と感違っている顔を見ると、滑稽でさえある。

もっとも、趣旨の無い計画書を作って、活動をしに行く人々に、反省を期待するのが、無理な話なのかも知れない。

二人の冬

「山岳部と探検部山岳班との違いは？と尋ねられて、適当に答えているけど、己自身そう問い返した時、自分自身を説得出来るか？」

「そうや、それや。今の俺らの迷いは、それや。せやけど俺は持ってるで。」

「お前のはあれで、俺のはあれやろ。」

「そう。俺のはあれで、お前のがあれや。せやからあかんねん。」

秋風が冷めなくなった蓬萊峽で、テントにも入らず、星を見ながら寝た時の、Kと俺との会話である。当時、我々は二年であった。

この頃、すでに二人は、相当重傷であった。それまでの合宿は、共に自分の好きな山行きの形でも無かったし、かと云って、より探検部的な山行きでもないように感じていた。

確かに、我々の活動が、黒部を中心として繰り広げられる事は、その心の底に、探検に通じる物があるが、実際の計画立案の段になると、山岳部的な、それに依られていた様に思う。こうした処に、二人の迷いが存った。これを単なる、一時の迷いとして、従来通りの活動形態の深追いの出来る二人でもなかったし、明解な解決策も無かった。そうした模索の中から、ようやく現状脱皮の糸口らしき物を見つけ出した頃の会話である。その糸口も、必ずしも、自分の好きな山行くと、等符号で結べるものでもなかった。尤も、その必要性はどこにも無いのであるが、現状に疑問を抱き、何とか方向を見い出せても、それが正しいか否か、皆目見当が付かない。その方向へ動き出しても良い裏付けが何も無い。その上、その年の夏、起こした事故の反省が終らず、何も結論が出ていない。一日も早く、大きな翼を拵げて、山を飛翔したい心にストップがかかる。もう半年もすれば、三年生としての執行部の時が来る。こうした模索をずるずるし続けたまま、三年の合宿を担当する事は自分自身許せない。気は焦るし、解決策も無い。現状維持で来年一年間を送るのなら、単独行の方がまだましだ。

こうした、どんより曇った冬の旅が、二人に続いた。こんな時見る、上級生も、下級生も何かに

向って、ばく進している様に見える。クラスの麻雀に明暮れる仲間さえ、生々として眼に映る。真剣に来年を生きようとしている二人が、どうしてこんな暗い冬の生活へ追いやらねばならぬのか。それならば一日も早く、山に復帰する為に退部しよう。ついには、ここまで来て、某山岳会の活動目的、内容、入会規順を取り寄せたのも、この頃であった。しかし、その会に入会すれば、確かにその場の迷いから解放される。が、この問題だけは、山を志指す以上、必ずぶち当たる迷いである。そう云う風に、ある人から教えられた。「今、逃げてはならぬ。」と、その人の眼は云っていた。

そうなれば、不安ではあるが、何とか見出しかけた糸口を辿る以外は無。今までの経験から削り出した糸口なら、そう大きな間違いも無いであろう。そう信じる以外、手はなかった。もし誤まっていれば、一日も早くそれに気付き、是正して行けばよい。そして俺が現役を出る時、一つの方向性を出してやれば……

苦しくも有り、不安でもあったが、三年生としての合宿について、二人は語り合った。

そして、次第に、その言葉が具体的になり、現地へ山の状態を問い合わせ手紙を書き始めた頃、ようやく二人は雪解けの春を迎えようとしていた。

現役という、若さに溢れた頃の話である。今、また、OB二年目の秋にして、同じ様な、冬の徑をただ一人歩いている。

(OB)

